

Title	H・R・C・ライト 第十九世紀初年東洋における英・蘭の抗争
Sub Title	
Author	渡邊, 国広
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1952
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.45, No.2 (1952. 2) ,p.141(69)- 142(70)
JaLC DOI	10.14991/001.19520201-0069
Abstract	
Notes	論文紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19520201-0069

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

たらう。この理由の本質的なものは然し英吉利毛織物工業の性格を吟味することに依つてのみ理解することが出来るのであるまいか。

然らば英吉利毛織物工業は、實際に如何なる状態にあつたか。その顯著な特徴は果して何か。緩慢な進歩はあつても、刮目すべき技術的發明乃至改良は當時の英吉利毛織物工業にはなかつた。加ふるに原料の獲得を規制した複雑な諸約定が厄介な事態を惹起することも屢々であつた。國家財政は毛織製品に對する課税の免除を簡單に容認することが出来る程裕福ではなかつた。免稅を希ふ業者の切實な叫びは無残にも踏躪られてしまつた。又勞働者の生活状態も當時において既に由々しい社會問題となつてゐた。従つてかかる事情の下においては、生産費の引下を策する業者の執拗な努力にも拘はらず、毛織物價格の尙一層の切下は殆んど不可能であつたといつてよく、生産は一般に絶対に引下の餘地のない費用の下で行なはれてゐたのが特色であつた。一部の不埒な業者は粗製濫造に依つて不可能な經費の切下に對處し、以て巨富を積もうとしたが、一般の器々たる非難に遭ひ、當局も亦嚴重な態度でこれに臨み、面倒な規則で拘束したために、生産費の一層の引下は至難な、そして非實際的な策謀と化したのであつた。「英吉利の織物は廉く、その良さと相俟つて、相當な賣口を持つてゐた」。然しこれ以上の切下は右に述べた事情から到底出來さうもない相談であつた。

故に第十七世紀の倫敦商人にとつて、價格の引下に依る販路の回復乃至開拓は殆んど不可能であつたといはざるを得ない。歐羅巴における厚手の毛織物市場が三十年戦争の痛手を受けて殆んど壊滅し去つてしまつた時、厚手の毛織物の生産費の一層の切下に依る需要回復の不可能なことを熟知してゐた利に聰い倫敦商人は、貧弱な在來の設備に縋り辛うじて新たに生産し得た薄手の毛織物を以て、一六〇四年の和陸以來漸やく友好の回復した西班牙・亞弗利加及びレバントの新市場に臨んだのであつた。かくして第十七世紀の十五年代以降において、南歐の各港市が倫敦の輸出貿易に重大な地歩を占めるに至つたわけである。然し東洋における新市場に適當した商品の製造のためには英吉利の織物技術は餘りにも幼稚であつた。このため、西班牙人の自國植民地への再輸出に依る流入を除けば、英吉利毛織製品は未だ東洋市場には見られず、亞米利加大陸も亦販路として成熟した段階になく、従つてこの兩市場が問題となるには時期を待たねばならなかつた。

倫敦の輸出貿易において、再輸出は毛織物に次ぐ大きな利益の源泉であつた。一六四〇年に倫敦商人は東印度の産物を露西亞・ネーデルランド・獨逸・伊太利及びレバントに向けて再輸出してゐる。同じ年にヴァージニアの煙草がハンブルグへ、地中海沿岸の産物がネーデルランドへ、歐羅巴の他の諸國の工業製品が亞弗利加及び亞米利加へ再輸出されてゐるが、これ等の合

計は、毛織物を除く自國産物の輸出總額と一致した。西班牙やレバントに對するニューファウンドランドの魚類、露西亞の皮革・蜜蠟及び毛皮、バルト沿海の穀物・木材及び大麻、獨逸及びネーデルランドの種々な産物の再輸出と共に、上述の旺盛な活躍が仲繼業者としての倫敦商人の名譽を高からしめたことは疑ひを容れないところである。(渡邊 國廣)

H・R・C・ライト

『第十九世紀初年東洋における英・蘭の抗争』

Ch. R. C. Wright, "The Anglo-Dutch Dispute in the East, 1814-1824." Economic History Review. Second Series, Vol. 3, No. 2, 1950. pp. 229-239.

ナポレオンの大陸封鎖を尻目に、國內における産業革命の急速な進展から、英吉利東印度會社は有望な新市場を東印度諸島に求めて進出し、原住民消費物資を輸出した。和蘭東印度會社は既得權益擁護のため英人業者のかかる企圖に反對であつたが、自己勢力の扶植に熱意を缺く會社幹部の消極的態度は、保守的な印度人と比較すれば餘程寛容なインドネシア人の外國産商品に對する消費癖と相俟つて、英吉利東印度會社のこの方面

への進出を益々旺盛なものたらしめた。

英人業者の東印度諸島計略は、實は第十八世紀末に至り始めて本格化した。七〇年代にあつては然し香料密輸が主であつた。一七八四年に英吉利は東印度海域を航行する自由な權利を獲得し、一七八八年から一七九五年までの殆んど十年間にペナンやマラッカを相次いで奪ひ、この兩港を中心として東印度諸島の北邊を大體その勢力範圍に收めて以來、第十九世紀に入つて新嘉坡を攻め、この地において迅速に發達した世界貿易は、和蘭の東印度貿易を壓倒するに至つた。

今や新嘉坡がバタヴィアに代り東洋の中心市場となつた。そして種々な商品がこの世界市場において集散された。英人業者はここでは火藥・阿片・鐵砲・陶器・双物・金物のほか綿・絹・毛製品の賣手となり、香料・錫及び砂金の買手であつた。尙又支那航路の英吉利船に依つて、巢燕・海鼠・白檀・檳榔烏・鼈甲・蜜蠟及び眞珠が齎らされ、新嘉坡を中心に英吉利の東印度諸島貿易は急激に繁榮したのであつた。

東印度諸島における英吉利の優位は然し綿製品の輸出に起因した。英吉利商人も亦仲介業者の排除・輸入關稅の引下等を畫策し、輸出振興に懸命であつて、このため價格は下落し、需要が一時に増加した。そして一八二三年にはジャバに三十萬磅が輸出されたが、これは東洋に輸出された英吉利綿製品全額の大凡三分の一に當つてゐた。

英人業者のかかる進出は然し一方において經濟的自由の主張に支援されること甚だ大であつた。自由貿易は運賃を低下させる、運賃の低下に依つて取引量は増加する、取引量の増加は一國生産力を昂進せしめる。ナポレオンの大陸封鎖を契機として英本國に急速に廣まつたかかる見解が、英吉利東印度會社内部に起りつつあつた新市場獲得の欲求と相俟つて、實は會社當局をして各方面への無謀な進出をも敢て企圖させるに至つたと見て差支えない。

貿易における自由を標榜して英吉利會社の東印度諸島進出を指導したのは、實にラッフルズであつた。如何なる制限も貿易の發展を阻碍する、大資本は會社をして東洋貿易の擴大を容易ならしめ、僅かな資金にも事缺く事業家がなし得る以上の進出をも當然可能とする、會社の繁榮は取引量の増加に依つてのみ達せられる、このために會社は商人たるよりも寧ろ統治者たるべきである。ラッフルズの過激なかかる見解は會社の施策一般によく反映され、文化普及の役割をも同時に演じた英吉利會社に依る東印度諸島攻略に對しラッフルズが與へた影響は、従つて相當に高く評價されねばなるまい。

ラッフルズは然し貿易における完全な自由を主張し續けたのではなくては決してなかつた。「錫坑は、自國鑛業保護のため、英吉利治下に置かるべきである」。そしてここにこそ急進的な植民政治家の眞意があつたのである。従つてラッフルズは無論自國以

外の如何なる業者も勢力範圍内に進出して來ることを喜ばない。事實、ラッフルズは、東印度諸島に活潑な動きを見せ始めた亞米利加人について、若し彼等に東洋植民を許せば、東印度諸島における英吉利權益のいくつかは蹂躪されるに違ひないといつて懸念し、又厚顔にも關稅の支拂を怠つた亞刺比亞人や支那人を非難すること甚だ急であつた。そして東印度諸島を不法なこれ等外國人の自由に委ねるよりは、彼等の活動を規制し統制する方が英吉利にとつて寧ろ有利ではないかとラッフルズは考へた。

ラッフルズの異常な努力にも拘はらず、東印度諸島における英吉利の地位が大體の安定を得たのは、一八二四年の條約に依り英吉利が和蘭を懷柔し、亞米利加人の東印度諸島進出を阻止することに成功して、新嘉坡の絶對的優位を獲得した以後のこととなつたけれども、一方において和蘭は、移住者の應需を主とし、保守的な貿易政策を繼續したため、ラッフルズの好意的意圖にも拘はらず、東印度諸島における自己の商業上の勢力を急速に失墜し、ジャワ貿易は英吉利商人に占有され、英人業者は阿片や綿製品を輸出して相當な利益を擧げることが出來た。しかもかかる傾向は、英本國における産業革命の進展に續く輸出可能能力の異常な上昇と共に益々促進されたのであつた。

(渡邊 國廣)

編集後記

正月も過ぎ木枯の吹き荒ぶ頃とはなつたが、三田山上は常にもまして活氣に充ちて居り人の出入も多い。時として狂い咲きもあるが花は時を忘れずにほころびる。學園にも年中行事の一つたる學年末試験と入學試験の受付が始まつたからである。霜を踏んで山に至れば、早朝から列をなして待つ志願者の顔、試験を控えて眞剣な學生の姿。

年々歳々同じことを繰返えしていながら、この季節は學校教育に身を置く者にとつて、懐しい中にも心懐しい一ときでもあり、又「螢の光」に一抹の淋しさを抱く一ときでもある。幾とせか育くみ共に研究に勵んだ學生達もこの處試験に備えられ、本棚の片隅に追いやられた本誌を取出し、ホコリをはたいて「さてあの先生の試験に關係のある論文はなかるうか」と血眼になつて見る者もあるだろう。

然し「三田學會雜誌」は試験の時だけ使う(敢えて讀むとは申さない)ものではございませんよ。卒業後もなつかしい三田の學風に觸れ、心のふるさと頼る心の糧として頂きたい」とはこの三月螢雪の功成り、實社會——その社會は光般の防衛隊(保安隊)設置の聲明にも見らるる如く、時候の所爲ばかりでもあるまい寒々とした社會——に集立ち行く卒業生諸君に本誌編集委員の一員として贈る餞けの言葉と致したい。

(白神俊彦)

昭和二十七年一月二十五日印刷 第四十五卷
昭和二十七年二月一日發行 第二號

禁 轉 載
東京都港区芝三田慶大經濟學部内
發行所 高 村 象 平
東京都港区芝三田豐岡町八
印刷所 川 口 芳 太 郎
東京都港区芝三田豐岡町八
印刷所 圖書印刷株式會社

豫約購讀料一年分 金八四〇圓(送料共)
半ケ年分 金四二〇圓()
豫約購讀料は發行所宛お拂込み下さい。
誌代變更の場合は精算決濟致します。
編集に關する用件、營業に關する用件、販賣
申込も發行所へ願います。

發行所 東京都港区芝三田二丁目
慶應義塾大學經濟學部研究室内
慶應義塾經濟學會
日本山版協會員B二一〇一六